

『独逸語学講話』

著者 関口存男

発行所 日光書院

昭和 14 年 6 月 7 日発行

昭和 15 年 11 月 25 日再版

昭和 17 年 2 月 12 日三版

扮役的直接法 (Seite 53 - 68)

Sie erzählte ihm, gegen die Planke gelehnt, mit weiser Miene, daß sie diesmal lange Ferien hätte, die Schule der Stadt würde aufgelöst, und bis eine neue gegründet wäre, habe es gute Weile. Ob er schon wüßte, daß sie Lehrerin werden wollte?

Nein. Das *wußte* er nicht. Er *hatte* noch nie davon gehört, daß es Lehrerinnen gab. Er fragte schüchtern, ob sie Elsbe bald besuchen wolle.

"Ach", sagte sie und warf den Kopf in den Nacken. "Elsbe ist ein Jahr älter als ich."

Frenssen, Jörn Uhl, 8.

『彼女は板囲にもたれて、とてもませた顔つきで、今度は休暇が大変長いということや、町の学校が解散になって、別なのが出来るまでには、まだ相当暇がかかることなどを話してきかせた。そして、あたしが学校の先生になるってことを知っているかと云う。

へーえ。こいつは初耳だ。だいいち女の先生なんてものがあつたかしら？時に、近いうちにエルスベのところへ遊びに来ないかと云って彼は訊ねた。

"いやよ"、と云って彼女はツンと取りすました。"エルスベはあたいより一つ年上じゃないの....."』

此の文例には二個所の切れ目があつて、全部が三つの部分から成っていますが、それをこれから第一部、第二部、第三部と呼んで説明することにします。

注目して貰いたいのは、『間接話法』の様式です。話の筋全体には、二人の子供が問題になっていて、一人は男の児、もう一人は女の児です。その外に **Elbse** という第三者の事が一寸出て来るが、これは別に問題にしなくてもよろしい。

作者は、作中の二人の人物の言ったことを伝えるのに、文法的に見ると、三つの異なった様式を用いている。まず第一部を見ると、**daß** を介して、接続法の定形を用いている。これがいわゆる間接話法です。その次になると、必ずしも **daß** を用いないで、**die Schule der Stadt würde** と云ったように、単に接続法のみを以て間接話法を表現している。その次になると、全然独立した文を用いて **Ob er schon wüßte.....?** と云ったように、文法上 **wüßte** (或いは **wisse** でも宜しい) というものがどんな意味をもっているかを知らない者には、うっかりすると此の文全体が、筆者自身の疑問であるかのように受け取れそうな形で表現してあります。けれども、接続法形の間接話法的用法を知っている人は、そんな誤った考えは持たないでしょう。

次は第二部に移るのが順序ですが、此の第二部が今日の研究の対象ですから、こいつは後廻しにして、まず第三部の方を先に片づけましょう。第三部を見ると、こんどは作中人物が直接に口を利いている。引用符がついているのでもわかるし、また **Elbse ist** 云々と云つてある、その **ist** という『直接法』の形でもわかる筈です。これはまずわ

かり切ったことですから、殊更に説明する必要はありますまい。普通の文法では、第一部のような接続法の用法(詳しく云うと其の構文形態には只今分解したような三つの階梯がありますが)と、第三部に於けるが如き直接法の用法とを比較して述べるのが習慣になっています。

余談に亘りますが、かくの如く直接話法と間接話法とを念頭に置いて見るということ、いわゆる直接話法(『接』ではなく、古くからの習慣では『説』と書く)という文法形態も、説明の都合から云えば直『説』といわないで、昔から多くの人が間違えて来た通りにむしろ直『接』と云った方がいゝかと思えます。というのは、字を揃えるために、間接の方を間『説』とするのはちょっとおかしいからです。それに、間接の方を接として、直接の方を説としたのは、単にあちらのことばを直訳して、ドイツ語ならば例の *direkte Rede* という、その *Rede* を是が非でも訳語の中で表現しないと気がすまないという気持ちから出たものらしいが、そんな道楽はまあどうでも好い問題ではないかと思えます。*indirekte Rede* [間接話法]の方は *indirekt* だけを訳して、*direkte Rede* [直接話法]の方に限って *Rede* も訳さなければいかんという理屈は成り立たないし、もし訳するとすれば *Rede* が『説』で訳された上おまけにまた『話法』で訳される、-----まあそれも云えないかも知れないが、とにかく両方が並行しないということは面白くない、いや、並行とか何とかいうつまらない枝葉の問題ではなくて、だいいち非常に多くの人がまちがえているということ、また、まちがえるなど云って、訂正に狂奔しては、このせちがらい世の中ではとても割に合わないということ、また、よく考えてみれば、間違える方の人間に実は理屈があるのだということ-----それから最後に、これが一番重大だが、実は小生自身も間違った時代があったということ、以上四つの理由によって小生は断然直『接』法論を主張するものであります。

さて、その次には愈々第三部の、*Nein* 云々ですが、これは、一応原文を読んで行けばわかる通り、決して筆者自身が自身の意見として述べているのではない。文法的に云えば直接法を使っているが、実は全部文中の男主人公が現に口に出して言った言葉を間接に伝達しているきりなのです。第一部に於けるが如き接続法を用いる間接伝達を持続するならば:

Nein, das wüßte er nicht ! Er hätte noch nie davon gehört, daß es Lehrerinnen gäbe.

となるでしょう。これに反して、若し第三部に於けるが如き直接引用の表現を用いるならば:

" *Nein, " sagte er, " das weiß ich nicht ! Ich hatte (こういう時は *habe* よりも *hatte* 或いは単に *wußte* の方がよろし) noch nie davon gewußt, daß es Lehrerinnen gibt. "*

となるでしょう。

その次の *Er fragte.....* は、これは筆者その者の名に於て宣言される普通の直接法です。

そこで、よく *wußte* と *hatte gewußt* と、それから一方、普通の直接法であるところの *fragte* とを比較して考えて見ると、やかましい証拠立てをするまでもなく、本講の問題たる扮役的直接法の意義が明瞭になるでしょう。同時に、此の文例では、三段をなして、『間接話法』なる意味形態に対する三つの表現形式が三つとも順々に用いてある事がわかるでしょう。

間接伝達の一形式たる此の扮役的直接法なるものは、最初に挙げた訳文をよく御覧になれば、それでもはや充分にその面白さがわかるとは思いますが、此の現象をなおも切実に意識して頂かんがために [*um diese Erscheinung eindringlicher zu Gemüte zu führen* 或いは *zum Bewußtsein zu bringen* ですな]、これに関して以下多少なんだかごたごたと理屈を云って見ようと思えます。

まずこの現象に扮役的**直接法**という何だか変な名称をつけたのは、実を申せば私の親父の倅なんで(ドイツ人は『おれだ』ということをよく **Das ist meinem Herrn Vater sein Sohn!** 或いは **Das ist der Sohn meines Herrn Vaters** というのと同じです。わざわざ方言口調を選んだのは勿論口調を滑稽化せんがためですが-----)そういうわけでマア、私の親父の倅なんですが、君の親父の倅もずいぶん粋狂じゃないか、何と云ってそんな変な名をつけるのだと仰有る方があるといけないから、一応まずその命名の理由に関して釈明しておきましょう。

扮役的(**mimicus**, ドイツ語ならば **mimisch**)というのにはわけがあります。此の種の**直接法**を選ぶ時には、筆者は、作中の人物の言ったこと、或いは思ったことを、第一部に於けるが如き、**間接伝達**の方法を取らず、また、第三部に於けるが如き、**Anführungszeichen** や、**挿入句** (**sagte sie und warf den Kopf in den Nacken**) などによって、自分の立場と作中の人物の立場とを判然と分つが如き方法を取らず、自分自身が直ちに以って作中の人物になり切って喋舌っている。普通の約束からいうと、うっかりすると筆者が作中の人物と混同されるほどの危険をすらも甘んじて引き請け、作中の人物に代って、(或いは作中の人物に『扮して』と云った方が好い)全責任を一身に背負って全景に乗り出して来ている。

這般[しゃはん]の関係を或種の**比喻**によって明瞭ならしめるとすれば、第一部の如き伝達は、たとえば使者が頼んだ人の伝言をするようなもので、こいつは、聴いている方の側から云うと、いちばん頼りなくて、**劇的価値**はゼロです。『大へん憤慨しておいになりました』と云ったところで、聴いている方ではそう手ごたえがない。ではまあそんなに憤慨なさないようによく申し上げて置け、ぐらいのところで、軽く扱かっってしまうことも出来る。-----ところで、第三の、**直接引用文**だが、こいつは、たとえば**人形使い**が、手先で人形を動かしながら**セリフ**を云っているようなものだ。人形そのものは、眼を白黒むき出してしきりに憤慨しているが、観る方の側から云うと、いくら憤慨したって、人形は結局人形なんで、**セリフ**は結局**セリフ**だから、見物人は平然として安心して見ている。人形の怒っているのも見えるが、同時にまた人形の背後に、人形よりも大きな人形使いが居るのが見えるから、そのために詩作と現実との距離は一見明瞭で、たとえどんなに真に迫る**セリフ**を吐いても、いわゆる **Distanzgefühl** [隔感-----もっとはつきりと訳するならば**不即不離感**]は厳然として維持される。美学者に云わせると、どんな芸術、たとえどんな**迫真力**を持った芸術にも、この **ästhetische Distanzgefühl** というものが**必要**なんだそうです。たとえば、裸体画を見て、助平根性が起きたら、それはもう**芸術**の**範囲**を一步脱したものだ、ということは、既に **Kant** の説いた **Uninteressiertheit** [他念なき心境]が**芸術鑑賞**の**根本**だという説でも充分明瞭でしょう。

けれども、**Kant** の説に対しても、その後多くの異論が生じている。**Kant** の **Interesselosigkeit** は、**芸術**をあまりに**客観的**に見すぎている、既に『**創作**』の態度に関して考えても、**純客観的**態度なんてものはありっこない、それはむしろ**芸術**の力を去勢するに等しい考え方だ-----なんて考え方が十九世紀の中葉以後に台頭して来ている.....

それはまああまり此処の問題には関係ないけれども、要するに、第三部に於ける、最も**直接的**、最も**迫真力**を備えた**表現法**と思われる『**直接引用**』という奴が、その実むしろ**反対**で、**引用符**がはつきりつついたり、『.....と彼女が云った』りする結果、むしろ或種の**意味**に於ては第一部の**間接引用**よりは**客観的**に、**芸術的**に、要するに、あまりに筆者と作中の人物とがわかれてしまっていて、わかれてしまっただけならまだしも、如何にも『**わかれました**でございます』といわんばかりの**わかれ方**をして、云わば、『**わかれたこと**を**露骨**に**標榜**している』といったような風になってしまっていて、-----一言にして云えば**人形使い**と**人形**との**関係**になってしまっただけがわかりましょ。

真に迫らせようと思って人形を造って原物さながらの如く動かして見せると云うのは一応もつともだが、人形を作ったということは、同時に『**人形使い**』がはつきりしたということになる。(こういう風に、物は何でも最初意図したのとは必ず**反対**の結果にな

るもので、こゝが面白いところです)-----結局、観客は、人形が泣いているのも見えるが、人形使いがパイプをくわえているのがいやに目ざわりになるという事になって来る。

此処で、この欠を補わんがために発明されたのが、『役者』、『扮役』という、第三の方法です。すなわち、人形使いは、まず唸[く]わえているパイプを捨てる。死ぬか生きるかの愁嘆場にパイプを唸わえている法はない。まずパイプを捨てる。その次には人形を畳んで横へのける。その次には自分が人形に代って舞台の上へ飛んで上がる。そして、まるで自分が作中の人物であるかの如く振舞ってみせる。泣くところでは泣く。笑うところでは笑う。倒れるところでは倒れる。はり飛ばされるところでは(少し痛いけれども)はり飛ばされる。少し痛いぐらひは我慢する。要するに、一言にして云えば-----役に扮するのです。

人類の文学も亦ほぼ私が今述べたような経路を辿って発達して来た。第一段は歴史家です。第二段は叙事詩人です。第三段は戯曲作者と役者です。

希臘で云うとはっきりしている。第一段は神話です(作者は民衆)。第二段は Homer です。第三段は Aeschylus, Sophokles, Euripides です。



扮役という名称を弁護するために、なお一つ、『本当に役に扮して作中の人物の口吻そのまゝを筆者が己自身の責任に於て真似するのだ』という点を特に強調して置きたい。それには既に、引用した文の、引用符のつかない **Nein** だけでもわかる。**Nein** には引用符がついていないどころか、その次に **Punkt** が打ってある。もっとはっきりやるならば『!』でも好いところです。わたしは、訳文の方で、『いゝや』とか『否』とかやる代りに、『へーえ』とやっておいた。これが凡てを説明するでしょう。この **Nein** は、筆者自身が、ほんとうに役者になって云っているのです。もし筆者に原稿を読ませるとしたら、筆者は、まるで自分が云うように **Nein** と力強く云うでしょう。第三段の **Ach!** (いやだわ)と同じような力を以て、しかも、**sagte er** などどいう人形使いを入れる余裕も隙もないほどの切実なる力を以て **Nnnneinnnn!** と云うでしょう。『へーえ、そんなことは初めてきいた!』既に女の教師なんてものが世にあることすらも知らなかったんだから、相手の女の児が **Lehrerin** になるときいては、こいつはどうも愕かざるを得ない。大きく眼を見張って、口を一寸とんがらかして、何かちょっと不平でもある時に云うような口調で『**ンノイン!**』というにちがいない。こういうとは **nain** という発音は出来ないで、どうしても **neun!** となるでしょう。-----まあ、そう云ったような **nnnneunnnn!** を(もし筆者が自分で此の個所を読むとしたら)筆者自身が発音して見せなければならぬ。筆者ばかりではない。この個所を人に読んで聞かせる時には誰でもそうしなければならぬ。いや、読んで聞かせる時ばかりではない。自分一人で読む時でも、その心得で黙読し、そういう口調が心の耳にはっきりと聞こえなければ、此の種の直接法の用法はその効果が失われてしまう。間接話法でも書け、直接引法でも書けるところを、何を好んでこうした形式を用いるかといえはそれはつまりそうした効果を狙わんがためであると思つても敢えて過言ではないと思ひます。

以上は、まあ多少誇張も混ったかも知れませんが、(多少誇張した方が現象の中心がはっきりするとしたもので)とにかく、扮役的直接法という名称を明らかにする事によって、同時に此の現象の本質をも明らかにしたわけです。



以上は説明で、なお多くの実例を引用しながら、其の本質をはっきりと突き止めて見たいと思ひますが、その前に、二三申し上げて置かなければならない事があります。

というのは、まず、この扮役的直接法というのは、普通は物語調 (Erzählungsstil) の過去に多く現われて来ますから、もっとはっきり云うためには *Praeteritum mimicum* 即ち『扮役的過去』と呼んで好いのですが、物語調には現在形もありますから、従って此の現象はそうした、謂わゆる歴史的現在にも現われて来ます。それ故、一般的に云う際には、むしろ *Indicativus mimicus* と云った方が正確です。これは、私が今日まで方々で書いたものの中で *Praeteritum* の方を用いてきましたから、こゝで改めて訂正をさせて頂く次第です。勿論 *Praeteritum mimicum* が実は非常に多いから、過去の場合にはそう呼んでおいても一向差支えはないのですが、一般的名称としては *Indicativus* でないと正確を欠くこととなります。

あまり沢山の新術語を造ることはよくないとは思いますが、或種のはっきりした現象に対してはどうしても何か印象的な名称がないというと、実際に当てて非常に不便で、名称さえついていれば、『あれだよ』といえ、『あゝ、あれか』といったように、一口でわかってしまう事が多いから、或る程度までは斯うした術語は必要なのではないかと思います。Wer darf das Kind beim rechten Namen nennen? と Faust にあるが、これは必ずしも中[あた]らない。

『正しき名前』なるものをそう懐疑的に一概に貶[けな]してしまうわけには行かない。如何となれば正しき名前は往々にして『名づける』と同時に『認識を促進する』こともあるという事を忘れてはならないと思います。

~~~~~

[1] Im Wagen erzählte sie weiter. Sie freute sich herzlich, ihn zu sehen; sie hatte vorgehabt, ihn zu besuchen, sie sei eben erst Paar Tage aus Paris zurück.

(Otto Flake : Horns Ring)

[車に乗ってから彼女はなおも話しつづけた。あなたにお目に掛かれてどんなに嬉しいか知れない、丁度お宅へお邪魔に上ろうかと思っていたところだった、実は数日前に巴里からかえって来たところなのでということであった。]

これは、非常におだやかな扮役的直接法で、終りの方では *sie sei* と間接法の形に移っているのでもわかる通り、うっかりすると扮役的であることには気がつかないくらいですが、*freute*, *hatte* 等の形が直接法形であるところに注目を要します。*freute* は、形としては二様に取りれるが、*hatte* が直接法であることは明瞭です。また、*hatte* の文が、決して筆者自身の意見でないことも明瞭だろうと思います。-----つまり扮役的直接法は、おだやかなものになると、意味としてはほとんど間接描写と何の変りもないような印象を与え、且つ間接話法形と並んで用いられることすらあるということがわかりましょう。-----普通文法で間接話法というものを習うというと、こうした場合が、文法にない不規則な現象であるかのように云われることがあります。それは間違いであって、生きた言語現象に不規則ということ、即ち『何の法則もなく、ただ単にそうなのだ』ということはありません。人工的なものには不規則はあり得るが、自然の現象に不規則ということはありません。不規則というのは、『規則がまだ完全でない』ということにすぎない。

それから、*Sie freute sich herzlich* という句をよく考えて見ると、普通の直説法 (即ち筆者自身の宣言) と扮役的直接法との間の相違が非常にはっきりすると思います。*sich freuen* という句に対する実際上の知識を持たない人は、或いは斯う云うかも知れない: 『彼女は彼に逢ったことを大変よろこんだ』というのだから、なにも扮役的だのむつかしい事を云わなくたって、それで充分わかっているじゃあないか。要するに彼女はよろこんだのだ。筆者が『よろこんだ』と責任を持って云っているのだから、やはり筆者自身の言だと見れば、それで好いじゃあないか.....

ちょっと成る程と思われる。ところが事實は全然ちがっている。それは偶然そういう場合と形が似ているというきりの話で、形が似ているからと云って同じだとは云われぬ。殊に此の場合問題を複雑ならしめているのは、『形が全然同じである上に、意味まで偶然両方とも自然に受けとれる』ということです。-----けれども、或る種の問題は、場合があいまいで微妙であればある程、むしろますますはっきりすると云って好い。此の場合がそれです。-----語学上のことがはっきりしないというと、どんなに『文字通り』訳しても、否、文字通り訳すれば訳するほど原文の気持を外れて行くという事実に対する面白い場合だから、なおハッキリと突っ込んで此の問題を究明して見ようと思います。それに、語学的にやかましい翻訳者ほど難解な直訳調になるなどと思っている人があるが、それはむしろ反対であって、ヘンな直訳調になるのは大てい語学の力のない『ブン学者』に限る、という事実にも注目して頂きたい。つまり普通人の考えている『語学的に正しい直訳』という奴は、実はみんな『語学的に間違っている』のです。

*Sie freute sich herzlich* を、『彼女は心からよろこんだ』といえ、それはいわゆる『語学的に正しい訳』だと思ふのが普通らしい。ところが、それはとんでもない間違いなのです。『彼女は心から欣[よろこ]んだ』は、既にもうスッテンコロリンと『誤訳』なんです。前後の意味がそれで幸い通ずるから、幸いマア間違っ合っているのだけれども、実は全然誤訳なのです。此の場合問題は軽微だが、こんな調子の語感を以って文学作品を訳したら、全体の調子が靴の裏から痒い所をかくようなものになってしまうのはわかり切っている。

扮役的直接法ということがわかった以上は既に詳しく説明するまでも無いとは思いますが、念のために説明すると、*Sie freute sich herzlich* は、筆者自身が云っているのではなくて、彼女自身が *Ich freue mich herzlich* と云っているのです。*Ich freue mich* ということは、普通よく云う会話口調の形式なんです。つまり英語の *I am very glad* です。-----もっとロコツに云えば、彼女は口でそう云っても、実は心の中ではその反対かも知れないので、*Ich freue mich herzlich* と云いながら、心の中では『いやな男につかまったものだ』と思ってウンザリしているのかも知れないのです。或いはそうした関係が小説の(小説の面白いところは、表面上の事件よりは、その裏にあるのだから)面白さかも知れないのです。-----こいつを知らないで、まるで筆者自身がそう云っているかのように、『彼女は心から欣んだ』などと訳して、しかも訳者自身が真面目にそう信じていたとすればどうでしょう。一寸した筆の具合で事件から趣旨から何からすっかり別物になってくる。そう云う『正しい訳』が世間にどれ位あるか知れやしない。

こういう『正しい訳』を征伐するのが、これが語学の使命です。こういう『正しい訳』は、どこが間違っているかというに、それは先ず何よりも『語学的』に間違っているのです。つまり扮役的直接法(名前はまあどうでも好いでしょうが)に関する実感がなかったからです。

語学の学問としての使命はこれで明瞭です。語学とか文法とかいうのは決して凡てを形式化して生きたる生の現象から遠ざかることではない。語学をおろそかにしたり、学問的な研究を軽蔑したりすることが、これがむしろ実際としては生きた微妙な現象から遠ざかることを意味することが多い。-----語学を好い加減にして軽く見ているいわゆる『ブン学者』に限って、翻訳などをすると、変なところで言語現象に感心してしまったり、文句に拘泥したり、常識判断が利かなくなってしまうたりして、その結果、自分の本領域であるところの、味や面白さや、表現の力などをスッテンコロリンと外してしまうことが多い。文学や文句の如何にかかわらず、その一段奥にある意味の世界や味の世界や、全篇の趣旨や中心思想などというものに対して充分の余裕を以って相対し得んがためには、よほどの語学者でなければならぬことは、常識で考えてもわかる筈ではないでしょうか。

それはまあ余談ですが、『語学』というものの真義に関して、世間ではかなりわけのわからぬ説をなす人が多いから、一寸触れて見た次第です。

最後に、もう一つ、重要な注意をして置きたい。これが扮役的直接法の形態を最も明らかにするでしょうから。-----*Sie freute sich herzlich* は、その次にたとえば *sagte sie* 等の挿入句を省いたものとは見られないか、という人があるかも知れません。なるほどそうした句を入れることもあります。けれども、それで此の扮役的直接法なる範疇を設けることの不必要を主張し得たと信ずる人があるならば、それに対しては簡単にかく答えるのが最も問題を明らかにする所以だろうと思います、即ち：『では何故 *Sie freue sich.....* と間接法の現在を使うか、或いは *Ich freue mich* と直接法の現在を用いないか？』-----かく云えば、*Sie freute sich* という直接法過去の形が、一種特別なものであって、しかも普通の、筆者自身の宣言としての直接法過去ではないことが、露骨に明らかになるだろうと思います。

此の例文は、区別という点で非常に微妙な面白い問題を含んでいると思いましたから大変長くなりました。次の例に移ります。

[2] *Da war diese Frau gekommen, sie mußte kommen, es war sein Schicksal, sie selbst war sein Schicksal, sie allein ! Hatte er das nicht gefühlt vom ersten Augenblick an ?*  
(Thomas Mann : Der kleine Herr Friedemann.)

[そこへ此の女が現われたのだ、また現われたのにはたしかにわけがある。それがおれの運命なのだ。此の女が、こいつがつまりおれの運命なんだ、こいつだけが！そう云えば最初逢った時からどうもそんな気がしたっけ！]

前の文例もそうですが、時間がすべて過去または過去完了ですから、その点に注目して見て頂きたい。過去も過去完了も、定形動詞が *Praeteritum* (過去)であるという点から、広い意味に於て単に過去ということが出来ますから、これらの場合を特に *Praeteritum mimicum* と呼んで好いと思います。

過去という点に注目して此の文例を見ると、過去というのは、筆者自身の *Erzählungsstil* (叙述体)なのですから、作中の人物そのものの考えは、過去のところは現在に、過去完了のところは現在完了のように思って好いわけです。訳し方も、この扮役的な形をそのまま日本語に写すというのならばともかく、それは少々奇抜だから、なるべく平易に、多少精彩を欠いてもいいから普通の日本語らしく表現しようとするならば、過去のところは現在に、過去完了のところ(*hatte.....geföhlt* や *war gekommen*)は現在完了のように訳しなければなりません(訳文を見よ)。

けれども、普通はあまりやらないが、扮役的直接法を文法形態に忠実に日本語に移して見ようと思うならば、それも出来ないことはありますまい。前の文例の *Sie freute sich* の際には、これは『彼女は心からよろこんだ』と訳するというと、文脈の関係によっては、飛んでもない反対の趣旨になってしまうことは先刻述べた通りで、これは一寸危険だと思いますが、こんどのは或いは扮役を扮役として写してもわかるかも知れない。どうせ、この文全体は、作中の人物が心の中で考えていることを作者 *Thomas Mann* がまるで自分自身が考えているように云っているのだということは、これは充分にわかり切っているから、前の場合のような誤解は生じないでしょう。直訳をやる場合には、三人称は三人称のままやり、時称は、現在になおさないで、そのままの時称でやる必要がある。*sein Schicksal* は、『おれの運命』と云ってはいけない、やはり『かれの運命』でやっつけるのです。ちょっと試みにやってみましょう：

[そこへ此の女が現われたのであった。また現われたのはたしかにわけがあるのであった、それが彼の運命なのであった、此の女が、そうだ、こいつがつまり彼の運命なのであった、こいつだけが！そう云えば最初逢った瞬間からどうもそういう気持がしたのであった！]

どうも『であった』だらけになって、甚だ拙い。ただ、『此の女が、そうだ、こいつが.....』なんてところだけは、筆の都合でちょいちょい扮役的效果を出すことが出来る。けれども、日本語の性質上、時称の点から見ると、どうも扮役的に訳しても、直接引用的に訳しても、ほぼ同じ効果しか出せない。ただ sein を『おれの』といわないで、『かれの』とやるぐらいなところだけの相異になってしまう。-----これは、ほんの一例ですが、扮役的過去の直訳法ということは、問題として提出しておきたいと思う。訳文の巧い人になら、或いは面白く直訳が出来るかも知れない。

[3] Ich kann nicht mehr schlafen ! erwiderte er und schaute auf. In diesem Augenblick trafen sich ihre Blicke. Er merkte das Mißtrauische, Lauernde in den ihren. In demselben Moment war ihm alles klar. Sie wollte ihn zum Schlafen bringen, um in der nächsten Station unbemerkt aussteigen und entfliehen zu können.  
(Schnitzler, Das Sterben.)

[眼がさえちゃったんだ！と彼は答えて顔をあげた。その刹那、二人の視線はピッタリと合った。彼女の眼底には何となく警戒的、待機的といったような一抹の気配がみとめられた。それと同時に彼は『ははあ』と思った。つまり、先ず彼を眠らせて置いて、次の駅に来た時に窃と下車して逃げやがるつもりだったのだ。]

こんどは、一番初めから中頃を過ぎるまでは普通の直接法で、Sie wollte のところからは一転して扮役的過去に移っている。この場合は、時称の点からいうと Sie hatte mich.....wollen と、過去完了を用いるべきであったかも知れないが、この場合は、完全な扮役的時称ではなくて、直接引用(Sie wollte mich)の際の時称を用いながら、人称だけを ihn にすることによって扮役的にしたものです。つまり、時称の点だけは、完全に筆者の主観に依らず、作中の人物の主観によったのです。-----時称の点では、扮役的直接法は、直接引用の時称を用いるか、或いは間接引用の時称を用いるか、どちらかしかないの、即ち過去か過去完了かの二つだけしかないから、第三のものが存在しない以上、そのいずれかに依るの外はないことがわかります。どちらかでなければいけないと決めてしまう理由はちっとも無い。

[4] So oft er den Weg durch den Gang zurücklegte, so oft bäumte sich seine Seele im wildesten Trotz empor, so oft sank sie in die hingegebenste Hilflosigkeit zurück. Er war entschlossen, zu gehen - und sie dem Gehafteten zu überlassen? Daß sie ihn höh'n'en ? Sie hatten ihn ja so weit gebracht, um ihn los zu werden ; dann war ihr einziger Wunsch erfüllt. Nein ! er wollte bleiben ! er mußte bleiben !  
(Otto Lidwig : Zwischen Himmel und Erde.)

[廊下を通るたんびに、かれの肚の中では『何おッ！』という気持がむらむらと込み上げて来て、それがまたおのずと腰が折れてペシャンコになり、実に情けない救われない気持になるのであった。どうせこんな家には居たくない-----けれども彼女をどうする？彼女をこの儘おめおめとあの厭な野郎に進呈しちまうか？あとで二人のお笑草にされるか？結局二人の手に乗ってまんまと追い出されるような形になりはしないか？そうなりゃ、彼女にして見れば大願成就だ。が、どっこいそうは問屋が卸さぬ。おれはこの儘頑張っていてくれるんだ！どうせこうなりゃあ頑張らざるを得ないじゃあないか。]

今度はかなり力強く表現されていて、作者がもうすっかり作中の人物そのものに成り切ったような形式で表現しているから、訳の方もつい調子に乗って、少々やり過ぎたかも知れないが、とにかく原文から来る力をその儘端的にほとぼしらせて見ました。こうなると、文字と文字、句と区を詳しく較べて見るといって、どれがどれに当るのやら、一寸わけがわからないかも知れない。また、語学的にすっかり原文の一語一語がこない得ない人には、あんまりこんなことをするのは剣呑かも知れない。けれども語学的に信用のある訳者ならば、これくらいの事は敢てしたって一向さしつかえあるまいと思う。ちっとも文字通りになっていない、こうなるともう翻訳とはいわれないという人があったら、では翻訳とは何だとケツをまくらざるを得ない。じゃあ訳して見ろ、ということになる。-----『翻訳とは何ぞや?』これは本当に考えなければならない問題です。

あなたの翻訳は、それはあんまり個性が出すぎる、ほんとうの翻訳というものは、そんなに個性や癖が出てはいけない、『無色透明』で『非人称的』でなければいかん-----斯ういう説をなす人がいる。称して **Bakademiker** という。そういう **bakademisch** なことを云ってはいかんです。個性はまた別問題だ。直訳をしたって出る個性は出る。悪い癖があればそれはまた反省して止めるまでのこと、それと、もっと重要な問題とを一緒にしてはいけない。個性や、癖や、そんなことはつまらん問題です。少くとも、そんなことがつまらん問題になる程に一段奥の真の問題を問題にしなければ真の究明にならない。

とまあいったような物の道理ではないでしょうか？

[5] Herr Giebenrath hatte ausgiebig geschimpft, als sein Bub zum Nachtessen ausgeblieben war. Als es neun Uhr wurde und Hans noch immer nicht da war, legte er ein lang nicht mehr gebrauchtes, starken Meerohr bereit. Der Kerl *meinte* wohl, er sei der väterlichen Rute bereits entwachsen? Der *konnte* sich gratulieren, wenn er heimkam!  
Um zehn Uhr verschloss er die Haustüre. Wenn der Herr Sohn nachtschwürmen *wolle*, *konnte* er ja sehen, wo er bliebe.  
(Hermann Hesse, Unterm Rad.)

[倅が夕餉の席に顔を出さないものだからギーベンラートさんは散々怒鳴り散らした。九時になってもハンスはまだ帰って来ないので、ギーベンラートさんは、しばらく用いなかった例の頑丈な鞭を用意に出してきた。畜生め、しばらく甘い顔をしていると、おやじの拳固をなめて掛かりおったな? 家に入れて貰えたら、せめてもの合わせと思うが好い！

十時になると親爺さんは表玄関に鍵をかけてしまった。碌でなしめが、夜遊びなんかしやがってからに、そんな洒落れた真似がしたけりゃあ、ついでに往来でなど何処でなど、寝たいところで寝るが好い。]

こんなものになると、おやじさんの鼻息がその儘出ないというと扮役的直接法が台無しになってしまう。おやじの口調その儘を、ただ時称だけ過去にして、筆者がそのまま芝居をしているのです。大坂辺のおやじだったら、『ほんまにほんまに.....』とか何とか云って、真赤になってぶつぶつやっているところです。

これをもし此の儘文法的に日本語に写したらどうせしよう。Es kommt auf den Versuch an! 物はためし、ちょっとやってみましょう。

[倅が夕餉の席に顔を出さないもので、ギーベンラートさんは散々どなり散らした。九時になってもハンスはまだ帰って来ないので、ギーベンラートさんは、しばらく用いなかった例の頑丈な鞭を用意に出してきた。畜生めは、どうやら、もはやおやじの鞭ぐらいは何でもないと思っているのであったか? 家に入れて貰えたらせめてもの合わせと思

うことが出来た！

十時になるとおやじさんは表玄関に鍵をかけた。もし倅殿が夜遊びを致さんと思召され候わば、いずこに身を置き給う可きやを、おんみずから探し求めさせ給う可きであった。]

まあ、こんなのも或いは面白いかも知れない。独文国訳ですな。もう百年も経ったらこんな日本語が出来ないものでもなかろう。出来た節にはお手打ち喝采ですな。

konnte というのは、俗語では mußte 又は sollte と同じです。普通の können とはちがいます。

[6] Annemarie rührte in ihrem Kakao herum und kämpfte mit sich. Sie wußte ganz genau, wo Bruder Klaus steckte, denn Annemarie war von jeher seine Vertraute. Unter die Linden war er mit ein paar Freunden gegangen, weil da am meisten los war. Ob sie nicht verpflichtet war, Großmama, die sich sicherlich Gedanken über sein Ausbleiben machte, zu beruhigen? Aber petzen wollte sie doch auch nicht --- was machte sie bloß? (Else Ury, Nesthäckchen und der Weltkrieg.)

[アンネ・マリーは、ココアを匙で掻きまわしながら、内心に葛藤を演じていた。彼女は、平常からクラオス兄さんと仲良しだったから、兄さんの行衛はちゃんと知っていたのだ。実はリンデン街が一番大騒ぎだということだから、二三の友達と一緒にその方へ飛んで行ってしまったのだ。けれども、お婆さんは兄さんの居ないことを非常に心配しているらしいから、自分としては、まずお婆さんを安心させる義務がありはしないか？かと云って、告げ口という和一寸いやだ-----さあどうしたものだろう？]

Unter die Linden war er.....云々の war は、これも普通に取っても意味はちっともちがわれないが、ここでは前後の語勢から考えると、やはり扮役的 direct 法と考へた方が好いと思ひます。

此の講に於て論じた扮役的 direct 法という現象を最も雄弁に証しているのは、此の例文の最後の was machte sie bloß? だろうとおもひます。『彼女はさて何をしたか?』などと考へてはすつかり文意を外れてしまひます。文も簡単であるし、文脈もはっきりしているから、これは明らかに "Was mach' ich bloß?" dachte sie bei sich という可きところを間接話法化してそう云ったものだろうという事は誰にもわかりましよう。

だから、扮役的 direct 法とは何ぞやという問に対して極く形式的に簡単に答へるとすれば、『それは間接話法の表現に接続法も引用形式も用はず、普通のまゝの形式で direct 法を用いてしまうことである』と云へば宜しいわけではす。